

澤村誠志 監修

地域リハビリテーション白書'93

隅田 俊子 (佐久総合病院)

第29回日本リハビリテーション医学会総会(澤村誠志会長)のメインテーマに地域リハビリテーションが選ばれ、全国で活動する医師を含めた多くの職種の方々から発表があった。いまだかつて経験したことのない高齢化社会に突入した日本で、医療・保健・福祉が連携しての包括的、継続的な対応策が必要であると叫ばれて久しい。しかしながら第一線の現場で働くわれわれは、かけ声としての連携はあっても、現行の縦割り行政の中で、この連携の実現の難しさを日々思い知らされている。第29回学会に参加し、そして本書を読むと、実に多くの専門家が、それぞれの立場からさまざまな取り組みを続けていることがわかる。同時に、学会長であり、本書の監修・編集をなさった澤村誠志先生の地域リハビリテーションに対する深い洞察と熱き思いを感じる。この多くの人達の努力と実践を知ると、かけ声ばかりで何もできはしないなどと文句を言うべきでないと反省させられる。われわれも今日から何かができそうだという気にさせてくれる本書である。そして日々悪戦苦闘している人達にとっては、明日への戦略と新たな仕事へのエネルギーを与えてくれる。

太田仁史先生の「地域リハビリテーション活動の歴史」、竹内孝仁先生の「地域リハビリテーションの本質」、澤村誠志先生の「地域リハビリテーションの現状と課題」の中で、われわれの頭の中で整理されずにいた「地域リハビリテーション」の理念が明確にされる。次に地域リハビリテーションと専門職の役割と取り組みの実際が紹介されている。今でこそ

多くの専門職がチームを作って地域リハビリテーションを分担しているが、かつてこの役割を一身に担っていたのは地域の保健婦であったのだろうと考えさせられる。森下浩子保健婦が、リハビリテーション教室の開始にあたり、施設も人材も、器機類も何も準備できていない、そんなところから何かやらなければならぬのが市町村保健婦の役割であると書いている。チーム作りの道は決して平坦なものではなかったろうし、今後にも多くの課題が残っている。

地域リハビリテーションにおける「地域」という言葉の概念については議論があるが、この概念とは別に全国各地の地域リハビリテーション活動を知ると地域リハビリテーションが実践されている「地域」それぞれが独自の特徴と問題を抱えていることがわかる。地域リハビリテーションの定義はこれらの実践例の中から形成されていくことだろうが、これほど地域に密着し、地域独自性を持つ仕事は他にないだろう。この仕事は地域住民と一緒にあってひとつひとつ手作りで作りあげる仕事と考える。地域リハビリテーションの基本は、障害を持って地域で暮らす人達のニーズに対し医療・保健・福祉の立場から素早く、そして実効あるサービスが提供され、この人達が住みなれた所で、そこに住む人々とともに一生安全に生き生きとした生活が送れるようにすること、と本書は教えている。5年、10年後にもう一度読み返されるべき本であろう。この仕事に携わる多くの人達に是非とも読んでいただきたい本である。

(B5判 400頁 7,000円 1993 三輪書店刊)